

研究会・シンポジウム報告

2015年5月16日(土) 定例研究会報告

テーマ： 経済学と経済教育の未来を考えるシンポジウム

報告者： 八木紀一郎(摂南大学教授)、大坂洋(富山大学准教授)、
炭谷英一(神戸市消費生活マスター)、有賀裕二(中央大学教授)、
吉田雅明(社研所員)

時間： 13:00-18:20

場所： 神田校舎5号館541教室

参加者数：45名

報告内容概略：日本学術会議が昨年8月に策定した経済学教育の参照基準の策定過程において、経済学をL.ロビンズ流に希少資源の最適配分と定義してマイクロ・マクロおよび統計学を標準として他は応用と位置づける極めて狭隘な当初案に対し、10数学会から異見表明が行われ、最終的には「制度的・歴史的」アプローチに配慮する表現上の譲歩が行われた。しかし、主流派の経済学を標準としようという基本的な趣旨は変わるものでもなく、これが大学評価等を通じて与える影響を思えば、これからも注視せざるをえない問題である。すなわち、完成したものとしてマイクロ経済学のメガネをかけた学生ばかりを育て、本来、その前提や誕生の経緯を考察する経済学史、経済史など、そもそもの経済学的思考の出発点となるべき科目が「応用科目」に押しやられ、対抗的な経済学も、萌芽的な経済学も、狭い背景へと追いやった先には、経済学を育ててきた豊かな多様性の土壌が失われ、経済学そのものの明日がなくなってしまう、という深刻な事態が予想されるからである。

この4月、意見表明した関連学会協力のもと、桜井書店より同名の書物が刊行されたことを受け、今年度予定されている第一弾の集会がこの度のシンポジウムである。当日は、編集代表である八木紀一郎氏の経過説明を含む基調講演に続き、現場からこの問題を考えると題して、中等教育から岸谷英一氏、高等教育から大坂洋氏による報告が行われた第一部、執筆者による個別論点の紹介として、有賀裕二氏、吉田雅明所員による報告が行われた第二部、そして全体討論の第三部のそれぞれにおいて、問題提起に同意する立場・しない立場、経済学を伝える側からの視点・教えられる学生の側からの視点、等々から熱のこもった議論が行われた。

記：専修大学経済学部・吉田雅明

2015年5月30日(土) 定例研究会報告

テーマ：「アメリカの墓地と葬儀—The American Way of Deathを考える」

報告者：黒沢 眞理子(専修大学文学部教授)

時間：14:00-17:00

場所：専修大学神田校舎7号館773教室

参加者数：12名

報告内容概略：

アメリカの墓地と葬儀について、19世紀に生じた田園墓地運動の全国的成功と20世紀メモリアル・パークの特徴、エンバーミング、ヴューイング、及びヒューネラルハウスといった特徴を有する葬儀の歴史的展開と問題点を検討し、過去と現在から考える墓地と葬儀の今後の展望を考察した。

「死者の置場所」でしかなかった植民地時代の墓地が、1830年代には市街地から郊外へ移動し、英国式風景庭園のデザインを採用した「田園墓地」に変化した。田園墓地は美しい自然風景観を持ち、また植物、彫刻が飾られ、墓地自体が観光名所、彫刻美術館などの役割を果たすようになる。また、墓地所有の概念が生まれ、自己の不滅化文化へと移行した。19世紀後半には営利目的の墓地が増加し、効率的・合理的設計がなされるなど、20世紀に入り、墓地とは分からないほどの「メモリアル・パーク」が生まれることになった。

一方、葬儀については、遺体から処理した内臓、血液の下水道への流入や化学物質の大量使用による土壌汚染を生じさせるエンバーミング、近年多額の費用がかかり、環境に大きな負荷を与えるヴューイング、顧客の多様化で収益が下がるヒューネラル・ハウスなど、葬儀の問題点を指摘した。

今後の展開として、カギを握るのはベビーブーマーたちである。というのも彼らはより自然を好み、環境にやさしく、個性を重んじるからである。現在すでに40%を越えている火葬と自然葬の増加がさらに見込まれることを指摘した。

フロアからは、田園墓地「西漸運動」の負の側面、田園協会と田園墓地発展の関係、ステータスシンボルとしての墓地所有、田園墓地が長子相続された背景、田園墓地と芝生の重要性など、多くの質問がなされ、活発な議論が交わされた。

記：専修大学法学部・末次俊之